303
6
5

始

帝國圖書館藏

一右馬助為道ハ長男也　為藤ハ母かはりてさうらふ妻の腹
也これのほかにまた三人也一女ハ中納言二女ハ侍従三男為冬
為藤ハわかくてハ名をハ為まさといふさきまゐりつるやうし三人ハを
時々昔妙音院の法をうけて秘曲を賜なりこれ一勝一人
までつきにありし又為道ハ七歳にて百首をよみ九歳にて
四三絃はしめ十歳にて連歌にしてまさす十四歳にてはしめて
法をもちふ七月廿一日也それしてかく奥にこの事三度も
あらはしむ十九にてなくなれ大嘗会にしたて催馬楽風俗
秘曲たるよしをめさるる年はしめて後白川院の日吉の御幸也あ
まり御遊ましかなるめぬ大嘗会御賀細々とこのうへにかく
の左相をいたしくわふ宜秋門院以下正元々年四月五日也御鞠御幸の時ハ上皇
後鳥羽院　帝ハ何日御所にてかわりてちかく拍子御遊まてハ院方

とあれハさりて為道やかて所労して給題相対なとし
おくれはしましてこれほとさきにまゐりつる間京上性心みる
ところにこれをさきの事也越清の詞紙のせいろいろかいハ人これを
ことつきにあれ又為道ハちちにまさりて上手にて侍き
為藤ハ五歳より秘曲廿首にとらせて長相こいふ信ハ妙音
院の御説也これをとりへすめきハ三四歳のころの秘事ハ法か
くれありけまつねきハこれかかたる心はへをしてもやさきに
法をあてける青蓮にかくる給たれハこれ為藤と法花の
池に入て修行道あをしたるにちの秘紙まきてなをもや給たり
て人これ秘後賢人也をあきらかにされには法しあさし
の地にことなれハこれをとりつきさかへくに給けるなり
十三の年さくらのかわ備所へまゐりつる十七のとし為道あいくして

梅が畑の宮へまいりておく 後高倉院御事也 孝道竹園に懇
しけるハ これ悪声にて 常くまいりてよんなハ 彼の子細にハ
ゆゝしく孝道ハ 孝道は妙音院へまいりやなかりけり 例ならね
心なとこそ 宗法散流の法詞にハ 我天下にとさむ
る故しあれは 下位の證とも あらし 又当流の家にて 為
し 啄木のわくあるつれは 翎にめしつゝくこそいハ
孝道は 妙音院の上に 啄木 一とくに 孝道と 諷練せよ
とおほしけるへしとて ねんころにかしくさ給 秘曲 啄木
めんしの所をさして ましとにかへしもなし 就中に此曲は
物ハ さて 手かき合 事ハ それ也 先に 楽しまされ
ましこれをはしめ 相手あしくいてハよすさに ゆきまゝにあるに手
いくまゝ四五 二三人もあて 先達につけて 啄木 遅速とかし

して引大こさなりしを一人して 秘曲ひくやうを聞ゆる
まひくつき也 秘ハなお秘ハあれ 音程きこえわくけとなるハ
思ふことかなふさる時さしをかし 抑方庁ハつねむつるす
まいりて先後まるハ 法師 拍子ハうしろや給てよしとに
啄木三十
こ秘曲すゝめさせ給 法等三年まてに侍るにつねしくしてき
すけるに 三十遍は急なるに 始ハ二三百反して 廿反いひてはかり
後ろに引ひき合するまてにかへして とりや給 これ戦
ある後にハ 松王にて 高階信雄かさゝめにしてひきとめける
たれは笛吹弄ことにあるくて まいらする也 孝 太宗の因に
まいと給て これはしく霜にかわりゆきさきゆき 玄象は四の
秘く暁天にいたる時にあつて 行者の心に吟しけり 青嵐の
さみたれ 御前にちかし入れぬれは いんきゝ白く かたらいて

百反

しられ翁にあつるかいこし節をもうたはれ又樂とも
にほひかゝめて後百反ひきかへし給はしくも侍らは
かうく二三ひんまいますまはす 萌子七樂は其かいおのおのに
いしめて三日三夜にはえつらえ節をも皆つかね合て目六に
つけて侍る定まりゆへん其のしな一兩り一所にて入
てれともすけまてそれはれけるさて人のしつる所をこ
きかりて絶夜百反とはひかれたりひかはひかすかくのとおし
こしも菩道一二反もかめある詞なし 常にはうたはもしさせ
こくまてとくとろいたけける信とれと思ふにすんなるにくし
あさまきのこやはあしのろつさりしえうつへしれけりかとそれや
きれけるやかろ猿にて又うきくは唱歌して面白けなる時

侍るに 百遍引の時はきのこ吟翁とたる人とそつきれはたいさき
こけとさあ治めて 念珠のやうしに川うぬきてそれはあし
まてさうらうて なろしれはそともに 菩薩ゆきれしは左手二は宜く
にほしかさめ妙なる園乱旋なりや 右まは宜く三なるりしの
ともかつまうれ物は侍るにそれ外まは手もかはす合も風俗催馬
楽までは 又あそう枝の拾聲 藏法なとまでも にほひのこ
しなるわけし かやしまえけこめくるみし三年なりや
まれ後はいらこ 其まてやすれなろるみなし さり声は
まなはし侍し 人也 百反ひきはやうに一年にてまてまなり
樂は一調子は一日にあてゝ 六調子は六日に一度ならあるみ
やうにひきくくましすめはやすまるみにはなさつて三年吟すに

まうけけり　十種傳奏　法性講けられ作人とゝいはるゝなるかは
かましけれは十種く巻は三百三十六曲まてはは伝へしは一万曲を
一具あるかは三秘曲とかや字伝とはまさに申しさたるなし 文の
多をとかなるかは宣命にこれをしるしたるに継母の西行なれ
但三十二代盛宗をさけれしは後はまつてを代織るし枝琴
の職にならせまきしは時は我が蒲子なれしかして法流はさて
まつそこは蒼頭なりけるは妙音院の流やくはかつのれの祖父蒲傳
かの志は法道の法道とあるとやまねれんやまたいつかなるかは
申べき事也とあらためはことに蕭子朝か琴ぬねしもなくれ
有生晏嬰の者あかりけるかまでし伯牙かの付属をうけて
勝けるくはわかれけ絶あるやうれは君河はまはこの外なし

曲節

ゆるされし楽器一としてはしのうしろなれはこの中へかいて
はさむくもてし給ふのこゝろなし謡一越調なるかし
其源まことに拍子手拍子始てまして類聚の目六絃なるまて
源まことに二反弦にて給ふ坂道圓基をさめのこしてあき
これ給うつ又的ならぬをゆるされとしも場まに因位一枚
をしさて皆道の絃かさまえさむ謡時はこれはあきまこと
曲ある武士をとさんして ひさ給ふことよ 謡曲の文ひき
拍子あつる時もあまる謡はそいまつる時もあまかくまる
一声ありけり也 ふしきいけりけるかはいやくなし給へね
楽器はなくまつ拍子もまつくはかしるをかるてよりこ此曲は
弟子はあつしき論をしる譜絃なるくよあれれはこゝし
らく曲の来る音は源氏絃しきかけとあるかれ謡ね

首曲ハ五言ハ四句比甲しはまて八句にむすまれあるもあ
又七言に作られたるもあり又五言にむすふもあり又四句に
て作られあるも又はしこあらぬさまにつくれる曲もあり
玄逆音曲
宗門楽鉤乱禅脱は根本は一つとも無音なる曲也とりわきて
實曲は所定めかたしかりしころより小前を
関係ん深しふしさためまとしや所以第二此春は天下に
関三国都
三国の忠あるもくおりのあんこあまりは胡笳にも給
へまゐれとも御くるは行ていて貴給人もなしかるし
て兵乱にまきて治漏に忠をしまてかくれ宮比性に
祥やれぬるみもふしさせとく人もはあり之に蒋時ハ
樂これほさをかりて後蒋道にまされけるは武らのまつ

おほ絃ぬきこゝろんこし給なさつけてしゆるく灌頂の
日をさ定てかききまふの蒋内山ほ小く信しまいらせて
牧白かられけるは廿三なりさらん以前に菊磋能申つむ
こ伝すもしかなるには命をこめて後生をまつれ給へ
こなくきやいかさるなるして廿九まてこれを遂給ぬる
あやうくもふしきや権現乃御神変さかしかりて近く
つゝしくてう侍れ蒋には此言を耳にふれけるか
まつてう済ことも不済といづくき毋此石にまかれん
こてかうさけるなちまつりいるかすこゝまのあしみ三百
みられまろあれのなす葉しかしらくくまたみま
おりかて宮前には信をあける毋は此本をきて平と

今てなくもう於ろ筆なし二人の女子をさうかまうらこて
かいあわしきを此みかきてなんら彼みなけりわらし
うれしさハうこむ花さうやしわも出しくなりけり
まさりてめてかたりきいうれをわらひてその夜ハ此三人
をやうすてし仁和寺の聖をうつし給ふし身一旦ハ
うらめしくも思ひて侍し心にも同しくあ〻し同し人を
家のまつりきけきハ良妻をおもふへし國のみやうさけ
るハ良相をおもふへしこれ人の心をこひとしへなれハ身
のたくさるまてをしれハさらに人をうらむる事なし
これにはもまつハ三人此君うちなるそてまいらせ給ふる
持ちさい菌瞬のこ此ことやしいささい給てうれしく我はか給

かのみちをつたまつてわらひてまた我いれ給ふさきを
給つれハさてもやさしき物かなハ我生を世にのまさん
とん霊に言はけれて我も人もいまてしてるあかつきつるを
尼ハ在生の頃けにかわやすく我物かたり遠れなき孝
子の所にすき給つる人々ハあるいまハいみしもやかく
こまかのなんらてまうるなくされハ悲母恩深しハ大海の心さし
を報謝のこめとも母々まうりてける所ハ身つうの所に我か
て懸てありへぬへまうさすしけるよく如身此さま
我もて此孝をくわうつるまくらしきを黄壌に謝せん
かくめなきらしさて灌頂の日ハくさまいまめくるそあね
そのこまてまうる才子まうし今人のわかしくもろあるわざ
人のめでたる何のわざハ一夜のこさ此馬性に七世まてある

ほきあそびけることも人のさためにあらしけりなやしけん又みち
のすゑ然おもふかなしさそやけり 祢芳斎なくなれけるに
我芳道ハ長嫡とうけおもに人ことにみちにつけすゝまれ
て任任にもやすまれる所なし 先年に関東へまいり
しけハ 武蔵国司 北條氏政ハ此国の方此見参に
まいり入てさる物ことしこれもいをんさめの妻女の
所領遠州にあるとある所の住ける身にしりてせうれと
継母 芳道に讒てつけゝるハ馬助ハ家のしるしての父に
みち然みさかれてかなしれハ所領とともうしなれさんさてし
かまくら殿へまいりぬ かうとあつかまする 芳行ハかまくらさ
ふらして父の後家としけきみとしさすくつゐんとく
本日をふゝ久しく経てとるさいくれハこけ然聞て芳道

さしくハねうつへ此身にしりあるなれ 別当異時かれ
法言の云すかさかあるこれや 父子諭対しといてとや
一識弾まるもりのハなやまく 開治ならんみかなしいそての
たけやけりつまらしめ然ををれさしんことくけりれ此まこさて
やかてかくし芳行を思定して東国にくたくなる 芳時ハ
又為すゝらし御傳聞ていうさしなくさまをしゆきつか
おしこんでにそ所まてゆきいつれこし 父ハ人のきこえるかこと
いくれあくて目かかるものなし いかなる身やもんとおもし
くれとも身同つきなやことをわしるくれハかられてゆきつ
まで父の寓あらくやさ然よりて身をうつさぬりしこころや
かゝるこ日としまみゆれとかへれかすきるれとまいふ身
なしさて芳道ハ為所のけさんにまうり草又将軍家

のはさんともまどり入てみれハ古ゝて陵なんとしハけるて
中ある尚の名とかけれどなきをみなるをみれハこの外
なにハあるつきに無所浮内読ありけるにこ敷すてに
まりがしといへどもむこころよりつきぬこれ程の一道也
長也そろく花貴紙うこかして千五百里北山川をし
のくすりたるしくてかへるを見れハ且ハ開来の盛を尽す
あるつきことにほとゝきすれハ跡はたらなかりしさや終ける
ハ一蘇雲の首ハ万里にかゝれ紙送むさしいつる宝比山ゝ入て
て紙はなりしくしてゆるなん舟にわ青わたなるすいあるつる
に烏孫ハ呉萩の匈奴なかりしかこと陳王王嫱とあそ
て馬上にておもう紙やすめこと鞍西ハ雲胡の将軍なれば

胡笳とあいして右道の曲をなむせり　玄宗ハ属近此岩き
也貴妃か隠すること百姓ごとくに　楽天ハ江州の
司馬也那家紙あくれとて道引をいくるみちをめてし
物紙賞すること朝家も武家も教科あるところ任
それ仁紙賞なとすれハ武目とやむることにしめ家のかれ
かりくこれ紙稽ことすれハまことに人としてさる歌序え紙き
しやんするにハ此詩か絵する丹州のつねとなやくさめて
まいらやあくつしこれ紙かの代よあそ終へしそていぬかん
のゝ保紙まつりてさ留絵幻稼紙すてゝ南紙おりふハ悪良
此みちこゝなくる末代あまりかゝける所えらけれとこあり
をしつる地なとまるゝ人なしいえんやつねにそや返すよりに
の物語なきも中傳つきにすりてまも也識者此所後見んかりけれ

かゝるめでたかりけることゞもありけるにやその後の武士もおほく此
哥道へ帰し給へる中にもとりわきある人はこの道に傍らけなく
てられあまたの人の目をおどろかしけるも此道にかゝりて青衣
をしおりからこの時をあらはしける中にも蓮道は霜の上の月の
社頭の詠
ひかり錦のうへにしきていとゞ光をそへける事も有けりさてや
さんこそ宇都宮の社に捧げける歌ども父子三人蓮道蓮阿蓮行
やうやうこれら歌の道にすぐれけることおほしとあまたきこえけり
侍りけり然るに其の家の子に加賀法橋因業といふものありし
が数寄なる僧侍りき、其人の歌乱れてまかりしつぎさはりしが
なく殊にしみ清悲にかよひて蓮道は仁和寺の法師にて
ことにすぐれたる流れにて武家の人々をはやすすめられ興
まいりてみちをさかえしむ仁をもとむ好みにてやすくこれ
ゆへ六十七年余ほどにけるよつまこの三條たちかへりぬる
さきには因業は六ちこえさせたまひたれば在國の風
因業臨終
たちよし流れの和歌をすゝめ今はその後なる寝殿は則これ
因業がありしあとのまたなきけるもまた浄庭にありしかれ
ものがたり臨終しけるおりにやがて雙調の調子あるおりに拍子を
ちかいこうちて蓮台ちかうはるかにすきたりしくさう入
てうちあはすなる拍子まつれあはしきこえて西の方
へさしあはれなる声くきこえけるは因業往生へ入て
しづくにかしこの哥あまた後ちかく聞えしに浪うちの音に
これぞ聞く蓮道一二度みつて少しよみたれどもあはれて
しかまちわびてこれぞみすかたるに蓮道は声をあげて
なげけるはやゝ暫やすらうと思ひしもの事しまで往生すとぞ
いふ

自也とつうろうろ五家のおもくし給由なれハ藤二
のなる所なるにて常にあそひまうす人なりしかハ
や地下の房たちか口入すへき由にあらぬ茶道らか今
仕れハとてかやうしハゆか出てらるゝやさせらしたまわりてく
ことをいけれハ面目なうしなれ香体ますらてたい入ぬ法
この家代みなふて一旦ハ茶道の非愛と似れとも入道殿
守なるれハたかかるへしことふ人ともありなりにほかさハ

茶道同所

かやうのことはしくく品庭あるつきまや上段の勝手に
まゐりて侍なれとさく茶道ハかくしの孫馬さし給て
あさ明のつきゆるきにハいのうすこつあのいろを西さまへ
ありまさなりさ聞此国こゆるさ此いうをまうけるかハ
王書の風俗此由をくらまさとあかれ此山をこゑける

くハ関の祢をわたりて宮の水くしみ渡すくけるこうさ
しまいか深我すなる時ハかれ野も白すハゆきかとみゆ覧
三嶋の命と宿てハ八山女の祢のやすこ此命しありき
すいのまけるさて日数ふれハ今の国まてやうくいきかねむ
し大昆ハ伴ぬき河なるうしなりれハてありこ北国し
此深さ以下をまうけれハこそ旅とも旅はくゆきあれなる
あやしさいれなとたりれて以ハ命こしさくほんこ城
めさして馬の伴めとまうめなりさくもそれこなかまくら
のやうハへれくらまさきけるうるあまま其詞云

亭ア弄ナ

茶道のくまるこ深ろもわきまへなからつれて
かゝやまうしいれ
をわまなしあつ居もこゝにつまくしまて道の昨しける
んとこうけ給さて茶道とにけさこ深なるへし

このたひまなかいりもことなるこは入所の伝給なりけりもとは善蔵
としたりまれけるみちしれ禅定寺のあるしとなりけるより後には
善光寺まてかくれ侍れは此世とすみかはさりけるものなり
かつらおもてもれ人のすみさとへまうてしけるかしこくろ
行出へしかしへいれぬるさしいて因幡かたくになりけれ
あれ谷ましうなれのけいくんもとし明らつし因幡され
ともなれみちとしまては後なは善明をいさてしぬるまて
まきをけりぬその後善明はいよりの終りて年十二とそいひける
林は月の正かんと後鳥羽院宮 左衛井の宮津成所このみまいりて家
のみちにいまて貞貫館具首これりぬもし左馬助に付けて
あるなりは持父の善ありしれるものつきてなりて思
なしてける太鳴高よ家清とも太宰と浜田と皆善明なこと
う

給ふらしつましょ聡母のいきかたよりてこの返されぬるに此然
隆国とみ侍さこの法さりは妙音院の浄頼之家の本とは
かねてしりつなりし浄紅をもしやうやうて法存あとまつい
まてかことをわし法戒給て紀ますことうめて休きらくこ
しておしいてこよりされはこれは然外てことにあまけるあさこ
たえぬる笠宗明さこはしとそこにと今そしくくまかりて
かつりてはまこときしに持て知身はなとあこかれて浜ならける
いとなしく侍らわ家は後は善道にもうなれたらん
身の紋てふかんとりはせふけりるとる後は思ひとらす
聡母はあやしれいのむくれたやくまのく三とはまて寄陪は
あるくれともついて孝籍かなえてやさぬこれすい事
皆はらくきここしめしおくつし善道と家して兼禎
三年十月廿二日よはひ七十二三歳とりて給わ 義吾房旨観

こゝろやけるほどにわかきときよりつかへけるかれは妻子なくて出家
さくらいはまくらをせず在はうさゝ地也こゝろやけるは又善知識
にあひし法蔵が計らひにて念仏すゝむへし菩行に水を
ひとつやくはりさめなとふうれ此相人あるつとめさは朝ち
かくあかりけれは息ゆいこえをよくしかねとうけは水を
すゝむ仍而西面にふして手を洗ひ口すゝぎ合掌させ
のことくして一心にあまつかる合掌はこゝろ一つ手は
さまくにうつことはすれあまこれはみるに宗秘のあや
内包とみゆ法蔵もとらは光明真言をみてゝ菩行はうけて
いよ〳〵こゝろすみ給ふや子細あるまし法しるしけるすれ
の侍かくんさて菩薩再まさしくかりて宗秘妙曲五ケの傳
さしも菩行給ひけるは法しるやすく思へしと

花をかれは又こころはか此時あくは法念仏あれこそやしるやけ
れはるかとをとうちるあまつりて菩薩に菩行とひて手はわ
合て此の一心あまつかりし此事とそあけれは法蔵に
菩行にまうしけはなりしてゆめ満心あるましくそれ
まくし又は再にやさわやを守りまさい則ちしるへく
あつさて此後は手をこそれしていきちくはまるこころ
とくのありやの法おもふるれはよろにあれはとこれ
この観心定はこれさとりまてもあるは侍るれあれは
叶ことも さて一七日そちに法蔵こそあまつれいね
具く一巻く ほけつけて奥くは起請の中くにそのとて
菩行にみさ 菩行まうしこそ實證とて やうて署判を
くはしつみを引さ三所にて誓紙とかきのせ件の一巻はやまう

当時のあとに侍る可や御やくしさい給しるさるさくれ
これ能か先これ能あらしけるよし之人ハ佛神の前後を
あらうふかごとし人は能をやさしくハ水なかもけ能哉
けるつたへられハちんまる所ハいかにもさゝ思ひくらし候也
らんしさて当時ハ又まりなける後ハ天下これりなりて
所作ことすまれとハなまて此ても此作の事をくいつれもとや
なかり当道能やうくさて先国奥義能さくしゆ給当時まゝ
御約束の所在ありけれハ宗の名雑もくまかりて五十此
は傳ともに移へハまゝよもなく今此ニ忠妙音院此御本尊件
の天女此画像又松閣の御數居三巻とられ、これ此守
領まてもさし栗田口此神庄より御相傳ありける事これも

当時かなへんまて御使あとつかま候ひしなれハ、これが
孝去こそ申へきこれも御相傳の時ハなにことにまうすも御領ござ
申て此皆給ふあきたけ時ハ何事も御果報といく
身やさし候てしかるにけるをもよむしくこときこそ
さぶらひ給し左此御下此たをこそしくしさけるくやさ始
こそしるり当時もいさめ申されさて哉ある御請あるとまし
ちいぬ記ことのある能ゆるしし也てハこれハまうさ事よ
てならり請ましあるまゝ御気色あり能当時ハさる事
此なりけり妙音院ある能これハ所記あるかをつけられける
事いくらもなくさてこそなをらハなくらもしの有る事まで
御く法深まるしらぬなきをさいしむ申としかとも
さしてや能あるいさもたるなさ此験するもいふてそくる

御こゝろ川かはるれハこれハ名人まてなんともまゝし
本院の御かくらの此清暑堂にて御あそひありしハまれし時
黄鐘調のかき合に奥に八也八也七無上絃をかけ此方に
ひかる討ば孝博かゆるさゝ譜よりもかんしいてゝありけれハさんと
不審しけれける所法深申けるハこれハさる事まて也へこけ家
秘さハ申やへこそ孝道も一度も伝へたる法深も此後御くれ
妙音院もありけくまてこれあるまゝにそうかへ申さんやす
ときしけれとも御不審ありぬなりうれハまれにつゐにして西園
寺殿へ御物語して申されしほとに御めかくしけるつゐさに御
いさめありてあれ夜ハあるハまれにてまた此後教学をへて後
法皇御相承へ入御ありて宵まて賀や孝順の伝ける

啄木

一 この御あそひハ本院へまいらせ給但かくれ此時は
秘曲の御さたハいかんして相国禅門給孝時か存日に秘曲ハ
きこしめさるやうになりて御尋ありける時相国申されし
給ふねありてむすしてやらしてさてこれ後ハ秘曲の事
御所範にハまいり給て石上流泉曲さりともさる程
なり啄木ハ名人ハ楊真操なりこれハ但この曲
ことまことにめさるゝまいハ後鳥羽法皇の御例さるへくしまて
孝秋ハ此まゝ所聞て孝しけるハ孝時法師の存日に直に
秘曲をまいらせ上むこ申かいひとてさうしいゝさいてそて
しかく御行儀申し給て法深代家におほしめされぬ
あれ流にハ家とまりけるたすけに不肖の孝秋にあいあつかり
仰れよとれ秘曲先日此御小師まてあり此曲ありさり孝秋ハ

やしくも曲道の嫡々也 ゆゑにこそ華葉の葉を廣やかれさ
らん 仍て家譜をひらいて先祖とさふらふ妙に聖知の
平代曲道を我朝にうつし給しより此方帝王
こゝにさるほどにおもしろきものにおぼしめすまゝに曲法代まてハまたに
九代也 されバこそ一度も女房所花なる佳例を云ふかれが
此局ハこれ苅萱が姉にあたる也 文章代々伝ハれバなりと
苅萱が相伝也 然に重秀遠よりしてこれを伝へ 女子に伝ふこと
さぞうの伝ありけるに 苅萱これ伝時まて伝へ来れる也 秘奏
の家譜を一時に出奔するにつけて 思ひに山林に居をしめん
ことをつゞけさとりけれバ こゝに又初めて此局に譲られ
居りしけるハ 苅萱が出向のかたき此かの物也 ことさらハ

女房所

七歳より女院の御方にさぶらひて 何時も宮中をさら
まかなしまゐに及び所の法師として 年浮信伝
ありしより本朝に例なくさり稀号さしに此かう
たんや それこそ例なきにあらん 今石川文婦ハ宇多の
平調に琢木此妙曲をもって 四宮此をもって此法女ハ一重
院に参て上原一面を調給 何法后ハ二条院に蕩尊此
曲をなつかしく思召 女物の所花なる 秘曲下此にこれが
ましましけるにや 他道にをいて非 但苅萱がおもく伝
てあれまた器秘はなれぬ宝にかけてかへりて非此
名残なるに 似るもの一面にむかひてハ 苅萱をめぐる
へしこさり申されけるとうさめにかほをさしくも
申さるゝ所さりにハかれ申さぬ人あまり浮言や

始七一面

ろうりけん五ヶ九日侍しハいまハしく一人のこり給つらむも
しかれともおハしまさでしとゝれけるうゑハまちかねさせ
させて獨古様の曲をあそハし蓮華をうりくさせそむかし
をしけるを白日儀内に廣隆寺に御居押上て御座を
まうけく蓮華王院て下と結縁譜を授てまいり蓮華
一文次く　上皇一遍　其後こまに川おめて一文　またに三文也
根田次緒三文
この後回忌らしまろいて其之間院司御劔を捧て
蓮華を授給ニ禄賜てさらに庭中よりて拝舞
再拝也この後王所のまゐらしなし此法なり此院
法印ニ此法時より手缺うこかし候いらとかゝえて

まゐりし戒を聞きてうらてこい既かなのう
こハれ先非くをしらぬ給つらにくとおもひさらしかれハ
おのうしまことまゐりしに御房ひろ文をとけりもしろくしあれ
あるてひをろれはかるへしさて法灌頂をハなれ
我ことかまゝかなくさし給けるこそ法印にハ殊し
一　内大臣時継にもしハ花山院の家此御事文これは當時ま
おしくも給十二歳にもしたうつは寳通に比大饗の時の御
遊ま法道あそはされハ萬丸にのよ道は當道か無面比
これ時ま法なりし戒當時侍らず、なほとそこの時は候や

給けり件乃道ハ三代乃てんし由一度まかるよあまさ
すでに啄調乃調子あまりハこれ琢調め給てあんのこ
さく四乃てんしゆぬけてとちさうらつまるいとけるき清
まされるれハ三代をいしえけちさも給へ千手は漆て
ましあられハ調子乃うちましめいてかき合よいて
こたはせけるに蒼門一曲蒼操きぬかはさのするして
れと聞けるか一己しいめさたりぬへうりけるかなしく於後
こてちろくありちやうりて三昧の秘曲うち奉りてにと
ねちしあけれハ一日つく好音井やよちかけりを如
えんすこえはおありもなくねちあをやもら名れ

ひとこゆまをしもさい人さしちろくさふとい給つる
罪人此度あるきハあやしくみとろめ給つる斗か侍
えん習昔く、対かきいてまそそなかりしやくまれきん
とく人まハあるしるとい乃れあいをれまむやかくまる斗
か年やさ奴一朝乃高名やこたはせれしゆハ隣国
ものこしまて承て顕氏高名んきけて給し人此さい
そらにえて侍しか直質てしそれ給て者性をかし
なからえうるされもいてやミ給きに人てあのて集ご
たりけりしこ乃まれの身やたの時ハ作法也いさしく
いさ習しておらハいえきも　法皇乃さい此僧告を
法在ゑるし此侍し　球示乃日　皇帝　高此家ちと此堂

しまも御世にハこれをくまいり給ひし時なる相楽
二三の絃にけりも給真まをく御かへしましきりも絃絃
玄賓よくゆしあそびこそ侍る我御方くしね高
くらゐも給ぬこさしく御ほさ相子そかりきてうけ
うけたる給しつハさのこはいけてあらハされぬもいはえん
おもしろみてまかりさせ且ハ妙音院もこなりてハ御遊宴
くまいりも給てもこれをとらしあるこひても絃御手なる
わかきにしろ御笛御琴にうちあさてさけく御唱歌
るとをかりあかりて末点さまれ小楽をとりいこころく
つけさも給ける御やうの御日記の所見てもさすかに

くち惜ぬ御ふしまてをしまずきかれハ玄賓のこ
ゑつきまあはれなるかく曲ことにあそびしてん其なか
まなんで和琴筝内の物とをまなびきこえし楽器に俘さ
も給ぬると聞えさせ人ともあまたかこもをかし
さもあれしかしてやさしね世相子の序るとかくしあ
りしらんみるかし此思し思ひつつひとり道理う
ありて御因にあらせあらまくてやさしねさても
まことしかれも此人のかたり侍しハ一定まや法頼
の識楽の日暮序けりも給けるこやらん形こそ一定なる
いあさましかれ昔時のあとのこの曲ハきけれバそい
かうもりし給ひけん妙音院の物語でおそて昔道也かし

けることはまてしるし給つるはなかなかよそにて侍るや
るゆへまさりなるは逝ふかしんなりけれはうるはしたり
らさりけるなり侍らん

一 大内にて遊行これは菅家より給音曲なとも此さる
あまりに仙人の作法にて給ひしにこれはこの御法
なれはてとりまゐは此家をかされたる晴もすなへし
この法ある傳給人もなき侍る也

一 一条摂政殿下實頼これは菅家より嫡々相続給 九条殿 中納言
殿 此説也 法華 法性寺殿 知足院殿 法性寺にて此祖師まて
代々非宗
やうてそ給 又一流へは本院のそれ 小一条 此大将此筆
まことしくあるにして法門の御師まいりて給 又照宣
此の祖師にはやりてまた此此は乃此御真言にこれ所れ
京極大殿 後二条殿 法性也なれはそのよかるになしかく
も宇治左の事を此あるはされ又おなくまた殿利柱
か付属とうけさせて侍りますす件の家此当は下あめし
これ路なるへき物とも京極殿の此両まて侍るこれとも
しかるかまて 後京極殿下 二條殿 なは 後京極殿より こく とつくれはそ

さゝげ給てかゝる妙なることなりけれハ崇給ふハうつくしむ
らぬれさりしもの真識の妙密に楽の名目なとりなしや
読んまとくしく給ひしかられけるまゝにて二条太政大臣一条殿
内侍のかゝれ候君もこれ田給のみちまなほしめしく
せ給ひ一条殿ハ秘曲まで授けまいらせ上らせ給ひけるに異朝
をとこゆかしきも始皇ハ琴我あいまみかゆへてうき合戦
まゐらし荊軻ハ清濁をわかちましてついに為我なる
かゆらりけい君として礼楽をまて給ひつゝまた天として雅
音をあきらめ給へし皆ハ天地相応の四海の要須せさ
てこそ園なし漢し角里も琴を横給ひ高祖は

一条殿我は

筑をうち不宰ハ七絃を奏給ひ我朝ましも光孝天皇
の御帝ハ琴曲を器とし弘仁仁和の御代ハ奏曲と
あいまいらせ給ひ清愛の御息宇治殿堀川殿こ
すく清撰の達者にて清賀ハ曲をいとこそや給ひき
様のを覚朝臣の道と喜し給へる渕あけてかゝう
つかまつりこれ後れなかりけていとも尊きに習臣まで
ちせ給ふ我にも奏何もしかしとかなし

一 二位光後まうさくのかゝやうき漢ノ貞をいふこれも奏何して
ある給ひ

一刑部卿侍従為教家七代乃集あつめしと川いて為氏乃一子ゝ
ましゝハ文并口傳のこる所なくゆつりうけられぬ
但しうれ後いくほとなくて文永九年五月十九日に卒し
為教作者
侍ぬるにくるしく侍しかとこ度これ説にまう
切けるハ他に見すしあれ給ひさハ為教乃文才をさん
しうち奉れ好るこそ被好るれと人てもくわこれ故六
まて灌頂をさくたへるうれとうけさせとりまいす叡達
貴女入作者
西園寺大納言實兼　花山院大納言長雅　法性寺中納言為春
中納言二宗　東院中納言為守　宰相中將具氏　このうち花山
院ハ叡季に傳させ給ける後まりて後灌頂とハ

為教にさうけさせ給けるまことにあやしく聞へむれハ
みなこれ違感まかきいしやとりもしけるハ黄壌れ
おりたいてさくいしく　作くゝめ　とあくれと
抑中録ハ為氏か所撰之　西園寺入道殿大納言猶人
まゆるすいり給ひさしむあれまて後ハまよしめれ為教手状
給えくるる仍年来乃才子おもてこれ状あるへんとめまし常
く用ら面乃一説とかわて中録とおかりくる状後日に人
これ状をえまらうしわて為氏要録こと　但中録もな
まかハあらしく侍らん昔も龍吟林あるに又新撰龍吟あ
ることれ状りて為氏ゆるして新撰要録こそ出ひへし
例なきまあらはや

一 孝秀これハ孝紀か長男也開眼ちつきて孝紀灌頂
をさけ侍く文年これハこれ侍ハまうさるなるの名れハ
後日に委ハ申へし

一 刑部卿ハ三男孝時ニ也これも十七にて灌頂をさけさせ給
太宮女院 東二条院 ニ乃あなる秘曲仰にへさ都をけまゝ
又実ハ本院乃御所范して給ふ音の道此するはまゝ
これをわさるかめ院宣して侍るよ

一 伊賀守成季これも孝時か弟子也この乃ちなる秘曲をけさせ
給人と中将ゐ画 實冬卿なと聞させ給譜も此道に康丸
まて花山院納言へまいらせるゆへ子孫あるこゝに聞へ侍

一 信太定憲これも孝時か弟子也あしかゝねは此世にて院宣
に召候へとし如此まれハ侍らん

清本

一 尾張守盛基これも孝時か弟子也廿余年此道宮さまに
しのちし秘曲ハ後深草院より院宣乃みちの弟子ともかゝれ
いつゝにかけて廿七歳と申し四月廿日より前道

りしむ同宿のかれなく承れハいさゝかも伴ひてさこなり
陸国にハ召されし南海ハ東国にまかり侍るとかや　北条左京
殿ハこれをふかく感し給ける　信馬守もいたくあはれ
かり若州もつれしまいらせ御日記のかゝくまかんにハ
絹を給らてもしるかなつしけてもるにる所替古あまはれ
れてし所病こあしやとりもして　ついに薨給ひ　あまり院北
四海主人まかりて　堺をこめくれハ　かつおしまつれる桜の
主人哥より
ちりもける哉みてまきける
かしむへきあるしを春にてせきいそいこゝろかな
まかしちるさくらかな
但州道いまた法源頂に下りも給はてやみぬ

一　近衛従五位下藤原行重　これまかり給ふく　但馬守泉苗
とハ若州まうけける
一　具足二女弁
一　源高政　法頂二男

このほとも深囲にまかく居しからは関せ侍れは居の心中
しくも忙しく給ける道の物語りなとし古文机なとに
むかひ居侍ハ物語まこと侍りけ給つれつれなるにさられ
小ち蔵懸給ぬるけいこれかに賞しけ世読の物語又
むかしき式部か日記なとよくてうへあいもし作り候
の源物語ワ此余まの心ちしてなつかしうく侍るは
昔ハけいこ成ても我らか筆ハ紙を見て習ひとふ
へし深囲にやうへハ直筆しうかれは侍りのこま多る物
すれハかやうをとうもれも雅楽の花いて給なきハ
なま乃門むく此みるもおのこやこちたく候らんかくて
東にかへらしるむかしく余りかし只居ハ中河のかたを
ところされ給へさてかきけらやうてらも奴のかはる
居て侍らん深囲もくらまきかれて わらひくくまれ
てる七日ハ佐宮にかし侍まゝ

蓋聞礼楽ハ人性をやはらけてしかも天地を
供する器なり　音こしてこ継崇め臣こし
て、継就これ古今の静譜やなかにくも
胡琴の三秘においてはかれし検杯の道なり
学にあり　西清ら漢家にハ則ち穆氏曹氏
二善の才有ゆまいまる西流枝流也家也所也
滑家清水にハいて所謂水滋こ小々んハ専ハ此

人々権門て袖をぬらしハ倫をみれハ予此家
流もさに三代の相続者ハ過する白氏西所の
正統ニをいて適ま七代累葉の家風氏全
此誠と希代の莫策也無双の相伝也さく
ま刑部侍郎のハ時乱に因てやまう岐く妙
曲ハ子孫ニ传くさてあり布く黄壌と乾坤
又執あゝは口絃ちまゝに癈て竹帛皆
に朽なんこれハ積善の餘慶ならハ遺訓く

賤といへども絃器の寿命すでにして絶なんとす
するに似たり天下の絃者門徒の家弟ならでは
これ誰か悲まざらん 聊絃宗を述のみ沙門あり
時の人これを嘆て文礼の隆円といふ其藝
すこぶる佗人の糟糠をさらに居武和泉の
業にあらねば 譬ども 假令血脈の縄墨を紀
て三五の胝絃を寿にちんかためにまた法言巻の有
抽を称て異し相承の深秘を伝ふる所也 皆色

虚吹の不言にあらはこゝに尺振の照映を残す
ことにするなる者也 筆に記載するは題目字の
韻心をさらは句の不同を嫌をは一倍一層の
まちさらん 是是悟也 出鬼く圓叔すいさすつれは
豈に披見を許すことなかれ耳

文化年中趣夏第三日雨中秘之

机業沙門 隆円

303
6
5

終